

共同体感覚が社会的適応および精神的健康に及ぼす 影響についての検討

－ 共同体感覚の形成要因としての養育態度に焦点を当てて－

姜 信善¹・宮本 兼聖²

Examination of the effect of Social interest on Social adaptation and Mental health : Focusing on Nurturing attitude as Formation factor in Social interest

Sinsun KANG and Kensei MIYAMOTO

【摘要】

本研究の全体的な目的は、まず養育者の養育態度は共同体感覚の形成に影響を与え、その共同体感覚と社会的適応ならびに精神的健康との間に関連が見られることが予想され、これについて検討することであった。そこでアドラー心理学の概念に沿った養育態度尺度を作成するために行った予備調査から、養育態度尺度作成のための示唆が得られた。次に、予備調査の結果を踏まえ、本調査を行った結果、アドラー心理学の概念に沿った養育態度は3因子構造であることが示された。ここで作成された養育態度尺度を用いて「養育態度→共同体感覚→社会的適応」および「養育態度→共同体感覚→精神的健康」のモデルを検討した結果、「養育者の養育態度が自分のことを理解し、自立心を促すものであると子が認知している場合、その親の養育態度は子の共同体感覚の形成につながり、その共同体感覚が社会的適応および精神的健康に正の影響を与えるであろう。」という本研究の仮説が概ね支持される結果が得られた。

キーワード：アドラー心理学、養育態度、共同体感覚、社会的適応、精神的健康

Keywords : Adlerian psychology, Nurturing attitude, Social interest, Social adaptation, Mental health

問題と目的

アドラー心理学の中心的理論概念の一つに共同体感覚というものがある (Ansbacher & Ansbacher, 1956)。共同体感覚は“他者に対する興味と関心 (Crandall, 1981)、私たちがお互いに、そして、世界と共に持っている共感的で情緒的な絆 (Mosak Maniacci, 1999 坂本監訳 2006) などと定義されている。また、アドラー自身は“他の人の目で見、他の人の耳で聞き、他の人の心で感じる”という言葉が共同体感覚の許容し得る定義であると述べている (Adler, 1927)。そして、共同体感覚は、幸福なる対人関係のあり方を考える、もっとも重要な指標である (岸見, 2013) とされている。

共同体感覚についての先行研究を見てみると、共

共同体感覚は、社会的適応や精神的健康とは正の相関があることが示されている。Lundin (1989 前田訳 1998) は、共同体感覚は肯定的な社会的適応の基準であると述べ、高坂 (2012) も、共同体感覚は全体的には、向社会的行動と正の相関を示し、社会的迷惑行動の中でもルールやマナーを破る行動とは負の相関を示すとしている。また、Manaster & Corsini (1982 高尾・前田訳 1995) は共同体感覚を持つ者は精神的に健康であり得ると述べている。一方で共同体感覚は、劣等感や自己中心性などと負の相関があることも示されている。Dreikurs (1933, 1950 野田監訳 1996) は劣等感の形成に伴って共同体感覚の成長が損なわれると指摘し、Lundin (1989 前田訳 1998) も利己的な人、自分本位な人、自己中心な人は共同体感覚が欠けていると述べている。また、アドラー (1926, 1973 岸見訳 2008) は、共同体感覚不足が、非行や犯罪、アルコール依存に影響を与えると指摘している。これらのことから、共同

¹ 富山大学人文科学系

² 富山大学人間発達科学部 令和3年度卒業生

体感覚の重要性がうかがえる。

しかし、共同体感覚と社会的適応や精神的健康との間では、相関関係についての検討は行われているものの、これらの具体的な関連について検討されたものはほとんど見当たらない。アドラー（1926,1973岸見訳 2008）によると共同体感覚は適応の観点からも身に着けるべきものとされている。また、共同体感覚は精神的健康のバロメーターである（岩井 2011）ともされている。これらのことから共同体感覚と社会的適応や精神的健康との具体的な関連について、検討することにより、人間発達におけるの共同体感覚の役割を明らかにできるであろう。

そして、アドラーは、育児や教育に重点を置く中で共同体感覚を重要視してきた。しかし、何が共同体感覚の形成を促進させているのかについての検討は今のところほとんど見当たらない。その中で野田（1992）によると、アドラーは、共同体感覚を「生得的可能性であり、意識的に発達させられなければならない」ものとし、育児や教育の力が共同体感覚の育成に不可欠であると考えていたとしている。このことから、子の共同体感覚の形成に親の養育態度が影響を与えている可能性が考えられる。

多くの子にとって親は生まれて初めて接する他者であり、子の人格や将来に大きく関わっている。そして、子の発達は自生的なものではなく、社会化の過程であり親は社会化の最初のそして最大の担い手でもあるといわれている（柏木,1978）。また、戸ヶ崎（1999）は、“親子関係は、子どもが経験する最初の対人場面であり、初めて社会的スキルを学習する場面である”と述べている。そして、菅原・八木・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）も、“児童期は、学校生活や友達集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がり、社会的な発達が著しい時期である。この時期の子どもたちの家庭外での成長・発達を支えるのは、子どもが依って立つ家族関係であり、家族関係が健全に機能しているかどうかが精神的安定や学校適応などに大きく影響するものと考えられる”と述べている。このことを踏まえると、親は、子が社会に適応していく中で重要な存在であるといえる。

親の養育態度が子に与える影響は大きく、これまでに様々な研究がおこなわれてきた。特に、「受容」と「統制」に着目したものが多く見られる。「受容」について、八越・新井（2007）は、“これまでに、

児童期における仲間からの受容には適切な社会的スキルと共感性が必要であること、そして、その社会的スキル、共感性の発達に母親の情緒的支持が関連していることが明らかになっている。すなわち、母親の情緒的支持が児童の社会的スキルや共感性を通して児童の学級適応に影響を与えられ”としたうえで、“優しくて温かい受容的な母親の養育態度が、児童の社会的スキル獲得の程度を高めるとともに共感性を望ましく発達させること、そして、その社会的スキルおよび共感性が児童の学級適応を高める”と述べている。また、姜・山崎（2015）は、子の意欲を高めるためには、子がポジティブな状態のときにはほめ、ネガティブな状態のときには慰めたり、励ましたりすることが重要であるとし、子の状態に合わせて「受容」を行っていくことが子の意欲のためには必要であるとしている。そして、戸ヶ崎・板野（1997）は、“養育態度が拒否的であるほど、児童は攻撃的な行動を多く獲得している”と述べている。一方、「統制」について、姜・山崎（2013）は、“子どもの理解を促しながら進められる統制であれば、意欲に正の影響を与え、また、一方的で子どもの気持ちや意見を無視した統制は、意欲に負の影響を与える”とし、“子どもの意見や思いを考慮に入れたうえで、子どもが主体的に考えて行動できるようにする関わり方が望ましく、一方的に行われる「親中心」の統制は子どもが自由にものごとに関わることを難しくしてしまう”と述べている。

上記の内容から、親の養育態度としての「受容」と「統制」が子に与える影響は大きいことがわかる。また、「受容」と「統制」はどちらか一方のみだけではならず、両方のバランスが取れた養育態度で子に接していくことが求められる。しかし、岸見（1999）によると、アドラーは罰したり叱ったりすることだけでなく、ほめることも否定している。このことから、「受容」と「統制」を主に行っていればよい訳ではないと考えられる。親の養育態度には多様な側面が求められると考えられるが、先行研究では「受容」と「統制」の2側面に着目したものが多く見られ（八越・新井,2007;姜・山崎,2015,2013;戸ヶ崎・板野,1997）、今後はその他の多様な側面に着目し、検討していく必要があると考えられる。

また、共同体感覚の形成要因として養育態度に着目するにあたり、教育による人類の救済をめざしたアドラーにとって育児、教育はアドラー心理学の中

心的な位置づけがされている（岸見 1999）が、アドラー心理学の概念に沿った養育態度尺度は見当たらない。岸見（1999）によると、アドラーは罰したり叱ったりすることだけでなく、ほめることも否定しており、アドラーの考える養育態度と従来の望ましいとされる養育態度との間には違いもみられるため、本研究では、この点を考慮に入れた新たな尺度作成を試みる。

アドラー心理学をもとにした子育てプログラムを開発・普及した岩井は著書（岩井 2015）の中で、親が子に接する際にとるべき基本的な態度は、「尊敬」「共感」「信頼」をもとに「勇気」を与えることだと述べている。岩井（2015）は、「尊敬」とは、“人それぞれに年齢・性別・職業・役割・趣味などの違いがあるが人間の尊厳に関しては違いがないことを受け入れ、礼節をもって接する態度”であり、「共感」とは、“子どもの関心に関心を持つこと”であり、「信頼」とは、“根拠を求めて信じるかどうかを決める信用とは違って、根拠を求めることなく無条件に信じること”であるとしている。従来の養育態度と比べると「尊敬」の部分に特徴が見られる。アドラー心理学は褒めることを否定しており、それは褒めるという行為には「能力のある人が、能力のないものに下す評価」という側面が含まれていて、親が子に対して、無意識に上下関係を作っているからだとしている（岸見 2013）。そして、アドラー心理学は上下関係から劣等感が生まれるとしており、すべての対人関係を「縦の関係」ではなく「横の関係」にするべきだとしている（岸見 2013）。「尊敬」が必要な態度として含まれているのはこのことによるものだと考えられる。また、岩井（2015）によると、親はその態度を通して、つまり、「尊敬」「共感」「信頼」をもとに「勇気」を与えることによって、子が「自立心」「責任感」「貢献感」を身につけられるよう支援することが必要だとしている。そして、岩井（2015）を参考に「自立心」「責任感」「貢献感」については、それぞれ、「自立心」“自ら考え、自力で物事をやっとうと心構え”、「責任感」“自分のすべきことや役割を認識しようとする心構え”、「貢献感」“仲間である他者に対して、何らかの働きかけをおこない、役立とうとする心構え”とする。これらから親の養育態度尺度においては、「尊敬」「共感」「信頼」「自立心」「責任感」「貢献感」の6つの側面に基づき作成することとする。また、「勇気を与える」

とは、「困難を克服する活力を与える」ということであり（岩井、2015）、困難を克服する活力つまり「勇気」は「尊敬」「共感」「信頼」の態度で接することで与えられるものである。

養育態度の認知について、金子・新瀬（2002）は、親の認知する養育態度と子の向社会性との間には有意な関連は見られないが、子の認知する父親・母親両者の養育態度が、子の意見を受け止め、子の気持ちに寄り添う「関心・受容的態度」や、躰について厳しく諭し誘導する「指導的態度」である時、子の向社会性を促進することを明らかにした。また、篠原・福山（1987）も親の養育を受ける子自身がその養育態度をどのように感じ、どのように対処するかに意味があるとしている。これらのことから、親が何を意識したのかだけでなく、親からの養育を子がどのように感じ、その後につなげるかが重要であると考えられるため、本研究においては親の認知ではなく、子の認知した親の養育態度を考慮に入れ検討していく。

また、養育態度に着目した研究では、母親の養育態度を取り上げたものが多く見られるが、篠原・福山（1987）は、父親の養育態度も子に影響を与えるとした。近年、女性の社会進出も進み、夫婦共働きの家庭が増えてきているため、育児を母親のみに任せることはできなくなってきている。そのため、養育してくれた相手をとらえる際に母親だけでなく、父親も含めるとともに、親ではなく、祖父母など親戚などから養育を受けてきた場合も考えられることから、養育者を親に限定せず自分をこれまで育ててくれた人を養育者として、本研究では捉えていく。

また、共同体感覚と社会的適応や精神的健康との間では、相関関係について検討されているものの、因果関係などこれらの具体的な関連についての検討は今のところほとんど見当たらない。共同体感覚を持つこと、そして、高めることの意義を明確にするためにも、共同体感覚と社会的適応や精神的健康との間の因果関係を明らかにすることが必要であろう。その中で、先述したようにアドラー（1926,1973 岸見訳 2008）や岩井（2011）から、共同体感覚が社会的適応や精神的健康に影響を与えている可能性が考えられる。

以上のことから、養育者の養育態度は共同体感覚の形成に影響を与え、その共同体感覚と社会的適応ならびに精神的健康との間に深い関連が予想され、

これらについて検討していくことが本研究の全体目的である。また、岩井（2015）の挙げた「尊敬」「共感」「信頼」から横の親子関係による無条件の信頼や共感を伴った理解する養育態度が必要であり、「自立心」「責任感」「貢献感」から子の自己や他者に関わることにおける積極性を促す態度が重要であると示唆される。

そこで、本研究の具体的仮説は以下の通りである。＜仮説＞養育者の養育態度が自分のことを理解し、自立心を促すものであると子が認知している場合、その親の養育態度は子の共同体感覚の形成につながり、その共同体感覚が社会的適応および精神的健康に肯定的な影響を与えるであろう。

共同体感覚が社会的適応および精神的健康に及ぼす影響についての検討

1. 子の認知する養育者の養育態度尺度の作成 — 共同体感覚の形成要因としての養育態度 —

予備調査

目的

本研究では、共同体感覚の形成要因として親の養育態度を取り上げて検討する。今回の予備調査では、共同体感覚の形成に影響を及ぼすと考えられる養育態度尺度を作成するために、アドラー心理学の概念に沿った項目を収集・作成し、検討することを目的とする。そこでまず、項目の収集・作成については次のとおりである。

アドラー心理学をもとにした子育てプログラムを開発・普及した岩井は著書（岩井 2015）の中で、親が子と接する際に取るべき具体的な態度について述べている。そこで本研究における養育態度については岩井（2015）が子育てするうえでのキーワードとして挙げた「尊敬」「共感」「信頼」「自立心」「責任感」「貢献感」の6つの側面に基づき42項目が作成された。各カテゴリーの内容は、「尊敬：親が子のことを一人の人間として尊重していたかどうかのカテゴリー」、「共感：親が子に対して共感の気持ちを持つようとしていたかどうかのカテゴリー」、「信頼：親が子のことを信頼していたかどうかのカテゴリー」、「自立心：親が子の自立心を伸ばそうとしていたかどうかのカテゴリー」、「責任感：親が子に對

して責任感を身につけさせようとしていたかどうかのカテゴリー」、「貢献感：親が子に対して貢献感を身につけさせようとしていたかどうかのカテゴリー」である。

方法

【対象者】

北陸の心理学を専攻とする大学生 11名

【調査時期】

2020年9月上旬

【調査内容】

調査者によって作成された合計42項目について、客観的にカテゴリーの分類を行うため、対象者に各項目が6つのカテゴリーの中で、どのカテゴリーに適合しているかという分類及び表現についての回答を求めた。その際項目の表現についての意見を自由記述で求めた。

＜1＞項目の各カテゴリーへの分類について

岩井（2015）を参考にして作成された、42項目に項目番号を振り、上述の各カテゴリーについての説明を示したうえで、次の教示をし、回答を求めた。「以下の各カテゴリーの定義と各項目を照らし合わせた際に各項目がどのカテゴリーに分類できるか回答をお願いします。（正解があるわけではないので直感で回答をお願いします。また、各カテゴリーの項目数は均等とは限りません）」

また、項目の分類について以下の教示を行い、自由記述で回答を求めた。

「どこにも分類できないなど項目自体に不備がある場合は、ここに記入をお願いします。」

＜2＞各項目の語尾の表現について

作成された各項目の表現について以下のような教示をし、回答を求めた。

「予備調査では、児童期から今までを振り返ってもらう形での回答を予定しています。そのため、各項目の語尾は、現在進行形にそろえる必要があります。上記の項目で語尾が現在進行形として適切でないものがあれば、項目番号と考えられる語尾の方の記入をお願いします」

結果および考察

項目内容の検討を行った結果、その内容において不備のあった1項目を除外した41項目について、回答結果をもとに各項目のカテゴリーへの適合性について検討を重ね、最終的に項目のカテゴリー分け

を行った。そのカテゴリー分けの詳細は以下の通りである。

[各項目のカテゴリー分類について]

①まず、調査対象者からの回答をもとに検討を行ったが、概ね本研究で想定した通りの回答が得られたことから、回答者からのカテゴリー分けに特に偏りが見られた項目について再分類を行った。

②そのカテゴリー分けに偏りが見られた項目の再分類の際には、参考文献や自由記述の回答内容を踏まえ、第1著者と第2著者の協議により、適合したカテゴリー分けを行った。

その結果、尊敬カテゴリーは〈私の親は、私に何か頼む際は命令口調ではなく、お願い口調だ〉〈私の親は、私に些細なことでも感謝の気持ちを伝えてくれる〉など8項目、共感カテゴリーは〈私の親は、いつも私のことを気にかけてくれる〉〈私の親は、私の悩みや心配事を理解してくれる〉など8項目、信頼カテゴリーは〈私の親は、私のことを一番の拠り所としている〉〈私の親は、私のことを無闇に疑ったりはしない〉など8項目、自立心カテゴリーは〈私の親は、人に言われる前から行動するようにと私に言う〉〈私の親は、最終的な決断は私に任せている〉など10項目、責任感カテゴリーは〈私の親は、最後までやり遂げる大切さを教えてくれる〉〈私の親は、私に思慮分別をつけるようにと言う〉など3項目、貢献感カテゴリーは〈私の親は、私に困っている人がいれば進んで助けるようにとよく言う〉〈私の親は、私に進んで人の役に立つ行動をするようにとよく言う〉など4項目に分類することができた。この結果を基に尺度作成を進める。

本調査

目的

予備調査で収集した41項目を基に、子の認知する養育者の養育態度尺度を作成することを目的とする。また、その際、信頼性及び妥当性について、検討する。なお、今後のすべての本調査では、倫理的配慮として、質問紙の表紙に回答が任意であること、回答をしない場合にも不利益を被ることはないこと、個人情報保護することなどを記載し、質問紙を配布する際に口頭でも説明が行われた。また、質問紙の提出をもって、研究参加の同意をしたものとさせていただくと質問紙の表紙に記載し、これにつ

いても配布する際に口頭で説明が行われた。

方法

【対象者】

北陸の大学生404名（男性215名、女性188名、他回答1名）

【調査時期】

2020年10月下旬～12月上旬

【調査内容】

<1>作成された養育態度に関する項目について

予備調査によって収集された子の認知する養育者の養育態度に関する項目について、それぞれ「全く当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。具体的な教示は以下の通りである。

「養育者のあなたへの関わり方に対してあなたが感じたことについてお聞きします。養育者とは、親などあなたを育ててくれた人を指します。また、回答につきましては、小学生から今までを振り返って回答をお願いします。各項目5段階となっておりますので、もっともあてはまるものを1つ選んで、○で囲んでください。」

<2>作成された養育態度尺度の妥当性の検討について

作成された養育態度尺度の妥当性を検討するため、鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1997）の「心理的ストレス反応尺度（SRS・18）」及び藤井（1998）の「大学生生活不安尺度」を用いた。

まず、「心理的ストレス反応尺度（SRS・18）」について、「全くちがう」「いづらかそうだ」「まあそうだ」「その通りだ」の4件法で回答を求めた。具体的な教示は以下の通りである。

「以下にあげる質問は、あなたのここ、2、3日の感情や行動の状態にどのくらい当てはまりますか。最も当てはまる数字を1つだけ○で囲んでください。」

次に、「大学生生活不安尺度」については、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の4件法で回答を求めた。具体的な教示は以下の通りである。

「以下にあげる質問は、あなたの大学生活において、どちらが当てはまりますか。最も当てはまる数字を1つだけ○で囲んで下さい。」

【分析手続き】

子の認知する養育者の養育態度に関する質問項目に対する回答を「全く当てはまらない」1点～「とても当てはまる」5点とし、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。

また、因子分析を行った後、妥当性検討のため、「心理的ストレス反応尺度 (SRS・18)」に対する回答を「全くちがう」0点～「その通りだ」3点とし、「大学生活不安尺度」に対する回答を「まったくあてはまらない」1点～「とてもあてはまる」4点として、各因子間の相関係数を求めた。

結果および考察

予備調査の結果を基に作成した子の認知する養育者の養育態度に関する質問項目の回答についての因子分析を行った。

固有値の減退状況などから3因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンはtable 1-1に示す。

第一因子は“私と気持ちが通じ合っている”“私のことをよく知ってくれている”や“私のことを一番の拠り所としている”など、親が子のことをわかろうとしている内容や頼りにしている内容の項目で

table1-1 子の認知する養育者の養育態度項目の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転後の因子パターン)

No	項目内容	F1	F2	F3	平均	SD
F1：理解・信頼						
41	私の話をよく聞こうとしてくれる	0.807	-0.030	-0.071	4.09	0.91
36	私と気持ちが通じ合っている	0.786	0.025	-0.016	3.54	1.04
20	私のことをよく知ってくれている	0.783	0.025	0.024	4.03	0.95
12	私と対等な関係を築いてくれている	0.764	-0.099	-0.066	3.82	1.05
3	いつも私のことを気にかけてくれる	0.763	-0.082	0.039	4.37	0.77
6	私の悩みや心配事を理解してくれる	0.751	0.024	0.025	3.81	1.05
40	私のことが一番好きだ	0.725	0.017	0.118	3.46	1.05
14	私と一緒にいて幸せだと思う	0.716	0.065	0.007	4.09	0.89
38	私にたびたび話しかけてくれる	0.670	-0.058	-0.001	4.47	0.69
25	私の喜びや悲しみなどの感情に同情してくれる	0.657	0.078	-0.019	3.87	0.97
19	私に何か頼む際は命令口調ではなく、お願い口調だ	0.634	-0.215	-0.028	3.60	1.02
1	私に些細なことでも感謝の気持ちを伝えてくれる	0.598	0.042	-0.039	3.89	0.91
28	私のことを一番の拠り所としている	0.590	0.085	0.269	3.04	1.08
5	私に何でも話してくれる	0.586	0.090	0.073	3.57	1.01
9	私が夢中になっていることについて支援してくれる	0.519	0.102	-0.138	4.26	0.83
2	私がみんなの役に立てるように支援してくれる	0.447	0.211	0.039	3.90	0.91
F2：自立・援助促進						
30	私に進んで人の役に立つ行動をするようにとよく言う	-0.001	0.798	0.103	3.38	1.08
10	私に困っている人がいれば進んで助けるようにとよく言う	0.075	0.683	0.073	3.40	1.09
17	私に人の役に立つことの重要性を教えてくれる	0.206	0.668	0.061	3.67	1.06
23	私に自分の言動には責任を持つようにとよく言う	-0.105	0.609	-0.158	3.83	0.94
13	私に思慮分別をつけるようにと言う	-0.072	0.593	0.057	3.70	1.04
39	人に言われる前から行動するようにと私に言う	-0.049	0.586	-0.036	3.53	1.09
16	私に失敗から学ぶことも大切だとよく言う	0.157	0.520	-0.156	3.73	1.10
29	最後までやり遂げる大切さを教えてくれる	0.266	0.500	-0.121	3.60	1.04
35	失敗を恐れず自分の考えで行動するように言う	0.217	0.482	-0.176	3.61	1.02
11	私にPDCA サイクルを確立するようにと言う	-0.120	0.456	0.137	2.42	1.04
F3：管理・統制						
24	私が自分ですべきことに口出しをする	-0.045	0.068	0.651	2.90	1.14
18	私が自分ですべきことを代わりにやってしまう	0.315	-0.254	0.554	2.86	1.20
21	私に指図する	-0.289	0.271	0.547	2.56	1.11
7	私に自分で物事を決めさせることはあまりない	0.023	0.018	0.537	2.30	1.03
因子間相関						
	F1	—				
	F2	.664	—			
	F3	-.316	-.121	—		
α 係数						
		0.931	0.867	0.655		

構成されている。そこで第一因子は「理解・信頼」因子と命名された。

第二因子は“私に自分の言動には責任を持つようにとよく言う”“私に進んで人の役に立つ行動をするようにとよく言う”“私に困っている人がいれば進んで助けるようにとよく言う”など、親が子に対して自立することや周りの人を援助することを促している内容の項目で構成されている。つまり、これらは、親が子に対して、自立することだけではなく、自立した上で周りにも目を配れる人になってほしいと接している内容であると言える。そこで、第二因子は「自立・援助促進」因子と命名された。

第三因子は、“私が自分ですべきことに口出しをする”や“私が自分ですべきことを代わりにやってしまう”など、親のコントロールが子に対して多く及んでいる内容の項目で構成されている。そこで、第三因子は「管理・統制」因子と命名された。因子を構成する項目の平均値を算出し、それを下位尺度得点とした。

信頼性の検討

table1-1 に示された各因子の項目で下位尺度を構成した。内的一貫性の指標である Cronbach の α 係

table1-2心理的ストレス反応についての項目内容 (N=404)

No	「心理的ストレス反応」尺度項目	平均	SD
F1：抑うつ・不安			
1	気持ちが沈んでいる	1.00	0.88
4	悲しい気分だ	0.70	0.85
6	何となく心配だ	1.35	0.97
14	なぐさめて欲しい	0.75	0.98
15	何もかもいやだと思う	0.77	0.98
18	泣きたい気持ちだ	0.51	0.83
F2：不機嫌・怒り			
2	感情を抑えられない	0.56	0.81
9	怒りっぽくなる	0.51	0.82
11	くやしい思いがする	0.67	0.92
12	怒りを感じる	0.49	0.79
13	いらいらする	0.67	0.87
17	不愉快だ	0.44	0.76
F3：無気力			
3	いろいろなことに自信がない	1.32	1.03
5	よくないことを考える	1.15	0.99
7	何かに集中できない	1.19	1.01
8	根気がない	1.19	1.03
10	話や行動がまとまらない	0.93	0.96
16	ひとりでいたい気分だ	1.01	1.04

出典：鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997)
新しい心理的ストレス反応尺度(SRS・18)の開発と信頼性・妥当性の検討
行動医学研究Vol. 4, No. 1 p22-29

数を算出したところ、第一因子、第二因子、第三因子それぞれにおいて順に 0.931、0.867、0.655 であった。これらの α 係数により、ある程度の内的一貫性が得られたと言えよう。

妥当性の検討

アドラーは育児や教育が共同体感覚の育成において欠かせないものとして指摘しているものの(野田 1992)、共同体感覚の形成や発達に関連した養育態度尺度についての研究は今のところ見当たらない。そこで本研究では、共同体感覚の形成や促進に関わると考えられる養育態度尺度の作成を試みた。ここで作成された養育態度尺度は以下のような先行研究の結果を考慮に入れ妥当性の検討を行うこととする。

山本・上手(2017)では大学生を対象に児童期に認知していた母親の責任回避的な養育態度が否定的評価予期につながり、それが大学生活での拒絶感に影響を及ぼすという結果が示されている。また現在の親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響について調べた研究(堀・長谷川,2018)では、母親の過干渉が対人ストレスに正の影響を及ぼし、それが登校回避感情に正の影響を及ぼすことが示されている。菅原・伊藤(2006)では、大学生を対象とし、児童期に認知された母親の「厳格一拒否」型の養育態度は、子どもの自尊心の向上を妨げ、対人不安を増大させる傾向があると報告されている。高富・桂田(2011)は幼少期から現在までの親の養育態度と青年期の精神的自立との関連についての検討を行い、大学生の心理的自立には受容的な養育態度、自立を促進する養育態度、自信ある養育態度が重要となってくることを示している。

このような先行研究の結果から、児童期から今までの養育態度及び現在の養育態度のいずれも現在の大学生の対人ストレスや対人不安に関連していること、また大学生活の適応にも影響を及ぼすことが推察される。

これらを踏まえると、既存の養育態度との関連を示しているストレス反応や大学生活の適応が、本研究で作成された養育態度尺度においても外的基準としてどれだけ関連しているかを調べることにより構成概念妥当性を検討できると考えられ、心理的ストレス反応尺度(SRS・18)および大学生生活不安尺度の項目内容、平均及びSDを table1-2,1-3 に示す。

子の認知する養育者の養育態度が子のことを理解

しているものや子の自立や周囲への援助を促すものである場合、子のストレスや不安は軽減されることが予想され、また、子のことを統制するものである場合、子のストレスや不安は増長されることが予想される。

そこで、作成された尺度の構成概念妥当性を検討するために子の認知した養育者の養育態度尺度と関連が予想される他尺度との相関関係の検討を行った。結果を table1-4 に示す。

子の認知する養育態度尺度の「理解・信頼」因子は、心理的ストレス反応尺度の3因子すべての間と大学生生活不安尺度の「評価不安」因子を除いた2つの因子との間に有意な負の相関関係が示された（全て $p < .01$ ）。子の認知する養育態度尺度の「自立・援助促進」因子は、心理的ストレス反応尺度の「無気力」因子及び大学生生活不安尺度の「大学不適応」因子との間に有意な負の相関関係が示された（いずれも $p < .01$ ）。子の認知する養育態度尺度の「管理・統制」因子は、心理的ストレス反応尺度の3因子すべてとの間（全て $p < .01$ ）と大学生生活不安尺度の「大学不適応」因子との間に正の相関関係が（ $p < .01$ ）、また、「日常生活不安」「評価不安」の2因子とは有意な正の相関関係が示された（いずれも $p < .05$ ）。

以上の結果から、関連が予想される尺度との間その相関関係は少し低かったが概ね予想通りの相関関係が示され、子の認知する養育者の養育態度尺度のある程度の妥当性が得られたといえよう。これを以て本研究では子の認知する養育者の養育態度尺度（以下、養育態度尺度と略す）として用いることとする。

table 1-3 大学生生活不安についての項目内容 (N=404)

No	「大学生生活不安」尺度項目	平均	SD
F1：日常生活不安			
2	留年したらどうしようと、気になります	2.22	1.07
4	1か月の生活費が足りるかどうかが、心配です	1.79	0.93
6	1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です	2.38	1.07
8	将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です	2.97	1.00
12	先生が近くにいると気になって仕方がありません	2.44	0.95
14	大学で自分が自分のことをどう思っているのか、気になります	2.50	0.99
16	友達と一緒に何かをしなければならないとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります	2.16	0.95
18	大学の先生と話をするとき、とても緊張します	2.21	0.94
19	4年間で卒業できるかどうか不安です	2.11	1.04
23	授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります	2.24	0.92
26	何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です	1.42	0.74
27	サークルで先輩たちとうまく付き合えるか心配です	1.82	0.95
29	先生に“研究室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかとても気になります	2.60	1.06
30	万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります	2.16	0.99
F2：評価不安			
1	テスト中に時間が残り少なくなると自分の考えがまとまらなくなります	2.50	0.88
5	テストを受けていて、わからない問題に出合ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります	2.25	0.94
7	卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です	2.96	1.04
9	授業で発表するとき、声が震えることがあります	2.53	1.02
10	テストを受けるとき、悪い点を取ってしまうのではないかと心配になります	2.83	0.89
11	必修科目の成績が“不可”だったらどうしようと心配になることがあります	2.93	0.96
17	申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です	2.67	1.03
20	大学の成績のことを考えると、憂鬱です	2.36	1.04
22	成績のことが気になって仕方がありません	2.16	0.94
25	テスト中、緊張して自分の力が発揮できません	1.84	0.86
28	授業中に何かをしなければならないとき、へまをするのではないかと不安になることがあります	2.25	1.00
F3：大学不適応			
3	入学した学部が自分に合っていないような気がして不安です	1.95	0.93
13	この大学にいて、何か不安な気持ちになります	1.82	0.85
15	大学を退学したいと思うことがあります	1.52	0.82
21	できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がありません	1.53	0.80
24	こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります	1.60	0.80

出典：藤井義久（1998）大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討
心理学研究 第68巻 第6号 p441-448

table 1-4 子の認知する養育者の養育態度、心理的ストレス反応および大学生生活不安の各尺度における因子同士の相関関係(N=404)

		心理的ストレス反応			大学生生活不安		
		抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力	日常生活不安	評価不安	大学不適応
養育態度	理解・信頼	-.174**	-.140**	-.206**	-.148**	-.063	-.167**
	自立・援助促進	-.069	-.046	-.158**	-.094	-.017	-.135**
	管理・統制	.189**	.242**	.214**	.116*	.123*	.217**

$p^{**} < .01$ $p^{*} < .05$

2. 養育態度による共同体感覚が社会的適応および精神的健康に及ぼす影響についての検討

2-1 養育態度による共同体感覚が社会的適応に及ぼす影響についての検討

目的

共同体感覚の形成要因として養育態度を取り上げ、共同体感覚を媒介した養育態度が社会的適応に及ぼす影響(「養育態度→共同体感覚→社会的適応」)について検討することを目的とする。

方法

【対象者】

北陸に住む大学生 527名(男性279名、女性246名、他回答2名)

【調査時期】

2021年10月上旬～11月中旬

【調査内容および測定尺度】

<1>子の認知する養育者の養育態度について

1. で作成された尺度を使用した。調査の手続き等は1. と同様である。

<2>共同体感覚について

高坂の「共同体感覚」尺度(2011)を使用した。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。具体的な教示は以下の通りである。「以下の項目内容は現在のあなたにどの程度あてはまりますか。もっともあてはまるものを1つ選んで、○で囲んでください。」

<3>社会的適応について

本研究での対象が大学生であったため、大久保・青柳の「大学環境への適応感」尺度(2003)を使用した。それぞれの項目について、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。具体的な教示は以下の通りである。

「以下の項目内容は大学環境でのあなたにどの程度あてはまりますか。もっともあてはまるものを1つ選んで○で囲んでください」

【分析手続き】

まず、子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚および大学環境への適応感の相関関係を求める。

次に、共同体感覚が大学環境への適応感に影響を及ぼすプロセスについて、共分散構造分析による検討を行う。その際、共同体感覚の形成要因として、子の認知する養育者の養育態度に着目し、それらの一連のプロセスについて、分析を行う。

結果及び考察

(1) 子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚および大学環境への適応感の相関関係について

養育態度および共同体感覚が大学環境への適応感に及ぼす影響の検討を行うため、相関関係が求められた。また、それぞれの尺度の項目内容、平均及び標準偏差を table2-1-1、2-1-2、2-1-3 に示す。そして、相関関係の分析結果を table2-1-4 に示す。

まず、養育態度と共同体感覚の相関関係について見ると、養育態度尺度の「理解・信頼」因子および「自立・援助」因子において共同体感覚尺度の全ての因子との間に有意な正の相関関係が見られた(全てにおいて $p<.01$)。それに対して養育態度「管理・統制」因子と共同体感覚尺度全ての因子との間では有意な相関関係は見られなかった。

次に、共同体感覚と大学環境への適応感の相関関係については、共同体感覚尺度と大学環境への適応感尺度の全ての因子との間において有意な正の相関関係が見られた(全てにおいて $p<.01$)。

最後に、養育態度と大学環境への適応感の相関関係について見ると、養育態度尺度「理解・信頼」因子と大学環境へ適応感尺度の全ての因子との間に有意な正の相関関係が、また養育態度「自立・援助促進」因子と大学環境への適応感尺度の「拒否感の無さ」を除いた3つの因子との間に有意な正の相関関係が示された(全てにおいて $p<.01$)。それに対して養育態度「管理・統制」因子と大学環境への適応感「課題・目的的存在」因子および「拒絶感の無さ」因子との間には有意な負の相関が示された(全てにおいて $p<.01$)。

これらの結果をまとめると、養育態度「理解・信頼」因子および「自立・援助促進」因子と共同体感覚尺度のすべての因子との間に有意な正の相関関係が示された。このことから、親の養育態度を理解や信頼を感じられるものや自立や周りへの援助を促すものと子が認知することと共同体感覚との間に関連があることが示唆された。また、共同体感覚尺度のすべての因子と大学環境への適応感尺度のすべての因子

との間に有意な正の相関関係が示された。このことから、共同体感覚と大学環境への適応感には関連があることが示唆された。そして、これらから、親の養育態度を自分への理解や信頼を感じられたり、自立を期待されたり、さらに周りへの援助を促すものと子が認知することは共同体感覚を通して大学環境への適応感に関連していることが示唆された。

(2) 子の認知する養育者の養育態度による共同体感覚が大学環境への適応感に及ぼす影響について

子の認知する養育者の養育態度と共同体感覚が大学環境への適応感にどのような影響を及ぼすのかについて調べるため、共分散構造分析を行った。有意な結果が得られなかったパスを削除し、検討を重ね

table 2-1-1 子の認知する養育者の養育態度についての項目内容 (N=527)

No	「子の認知する養育者の養育態度」尺度項目	平均	SD
F1:理解・信頼			
1	私の話をよく聞こうとしてくれる	4.36	0.87
3	私と気持ちが通じ合っている	3.68	0.99
5	私のことをよく知ってくれている	4.06	0.97
7	私と対等な関係を築いてくれている	3.98	1.08
9	いつも私のことを気にかけてくれる	4.26	0.82
11	私の悩みや心配事を理解してくれる	3.78	1.10
13	私のことが一番好きだ	3.52	1.03
15	私と一緒にいて幸せだと思う	3.85	0.94
17	私にたびたび話しかけてくれる	4.33	0.81
19	私の喜びや悲しみなどの感情に同情してくれる	3.99	1.00
21	私に何か頼む際は命令口調ではなく、お願い口調だ	3.56	1.10
23	私に些細なことでも感謝の気持ちを伝えてくれる	3.87	1.01
25	私のことを一番の拠り所としている	3.06	1.07
27	私に何でも話してくれる	3.37	1.08
29	私が夢中になっていることについて支援してくれる	4.09	0.91
30	私がみんなの役に立てるように支援してくれる	3.69	0.97
F2:自立・援助促進			
2	私に一人で人の役に立つ行動をするようにとよく言う	3.54	1.12
4	私に困っている人がいれば進んで助けるようにとよく言う	3.52	1.11
6	私に人の役に立つことの重要性を教えてくれる	3.57	1.14
10	私に自分の言動には責任を持つようにとよく言う	3.70	1.11
12	私に思慮分別をつけるようにと言う	3.56	1.10
16	人に言われる前から行動するようにと私に言う	3.54	1.12
18	私に失敗から学ぶことも大切だとよく言う	3.75	1.14
20	最後までやり遂げる大切さを教えてくれる	3.73	1.08
24	失敗を恐れず自分の考えで行動するように言う	3.49	1.11
26	私にPDCAサイクルを確立するようにと言う	2.55	1.10
F3:管理・統制			
8	私が自分ですべきことに口出しをする	3.36	1.15
14	私が自分ですべきことを代わりにやってしまう	2.95	1.19
22	私に指図する	2.80	1.14
28	私に自分で物事を決めさせることはあまりない	2.27	1.09

table 2-1-2 共同体感覚についての項目内容 (N=527)

No	「共同体感覚」尺度項目	平均	SD
F1:所属感・信頼感			
1	自分から進んで人の輪の中に入ることができている	3.01	1.09
3	自分から進んで人と信頼関係を作ることができている	3.22	1.06
5	積極的に周りの人と関わりをもつことができている	3.21	1.04
7	自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができている	3.75	0.98
9	全体的に他人を信じる事ができている	3.28	1.08
11	今自分がいるグループや集団に自主的に加わっている	3.50	2.03
13	自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している	3.57	0.98
15	周囲の人との活動に積極的に参加している	3.29	1.04
17	頼りにできる人がいる	3.83	0.99
19	周りの人を無闇に疑ったりは決してしない	3.33	1.06
F2:自己受容			
2	自分自身に納得している	3.06	1.12
6	自分で自分自身を認めることができている	3.17	1.13
10	欠点も含めて自分のことが好きだ	3.00	1.16
14	今の自分に満足している	3.06	1.14
18	今の自分を大切にしている	3.61	0.98
21	自分には何かしら誇れるものがある	3.32	1.08
F3:貢献感			
4	進んで人の役に立つことをすることができている	3.31	0.95
8	人のためになることを積極的にすることができている	3.37	0.93
12	困っている人に対して積極的に手助けすることができている	3.43	0.90
16	他人のためでも自ら進んで力を尽くすことができている	3.41	0.94
20	周囲の人々のために自主的に行動することができている	3.39	0.91
22	誰に対しても思いやりをもって接することができている	3.73	0.89

出典：高坂康雅(1999) 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究 59 p88-99

た結果、figure2-1-1、figure2-1-2、figure2-1-3 および figure2-1-4 のモデルを得ることができた。なお、モデルの適合度は、table2-1-5 に示す。

主な結果について以下のようにまとめて見ていく。

①養育態度[理解・信頼]→共同体感覚[貢献感/所属感・信頼感]→大学環境への適応感[課題・目的の存在] (figure2-1-1,2-1-2 参照)

figure2-1-1 及び 2-1-2 より、養育態度「理解・信頼」が共同体感覚の「貢献感」や「所属感・信頼感」にそれぞれ正の影響を与え、それらが「課題・目的の存在」に正の影響を与えることが示された。

まず、養育態度「理解・信頼」が共同体感覚「貢献感」に正の影響を及ぼし、共同体感覚「貢献感」因子が大学環境への適応感「課題・目的の存在」因子に正の影響を及ぼしたが、「理解・信頼」には、親が子に対して、感謝の気持ちを伝えたり、拠り所としているという態度で接したりなど、親が子のことを頼りにしている内容が含まれている。「貢献感」

table 2-1-3 大学環境へ適応感についての項目内容 (N=527)

No	「大学環境への適応感」尺度項目	平均	SD
F1:居心地の良さの感覚			
1	周囲に溶け込めている	3.38	0.94
3	周りの人と楽しい時間を共有している	3.84	0.97
6	自由に話せる雰囲気である	3.82	0.96
9	周りに共感できる	3.65	0.86
12	周りの人と類似している	2.84	0.94
15	孤立している※	3.77	1.05
18	周りから理解されている	3.31	0.88
21	受け入れられていると感じる	3.48	0.91
24	リラックスできる	3.66	0.96
27	ありのままの自分を出せている	3.34	1.03
F2:被信頼・受容感			
4	他人から頼られていると感じる	3.28	0.96
7	必要とされていると感じる	3.28	1.00
13	他人から関心をもたれている	3.01	0.89
16	一定の役割がある	3.14	0.88
22	良い評価がされていると感じる	3.23	0.84
25	存在を認められている	3.54	0.86
F3:課題・目的的存在			
2	熱中できるものがある	3.79	1.01
5	好きなことができる	4.01	0.85
10	満足している	3.55	0.99
14	退屈である※	3.49	1.04
19	やるべき目的がある	3.54	0.95
23	自分のペースでいられる	3.88	0.88
28	寂しさを感じる※	3.25	1.14
F4:拒絶感の無さ			
8	その状況で嫌われていると感じる※	3.61	0.95
11	無視されていると感じる※	4.08	0.91
17	疎外されていると感じる※	3.94	0.94
20	自分が場違いだと感じる※	3.57	1.09
26	浮いている※	3.61	1.01
29	他人から干渉されているように感じる※	3.63	1.00

※は逆転項目

出典：大久保智生・青柳肇 (2003) 大学生用適応感尺度の作成の試み
 一個人-環境の適合性の視点から
 パーソナリティ研究 第12巻 第1号 p 38-39

には、人の役に立つことをしているか、それらを自ら進んでできているかなどの内容が含まれている。親の養育態度から、自分が親に頼りにされていると感じている場合、それに対して応えようとするのではないだろうか。そして、親からだけでなく、周りから頼りにされていることにも応えようとするのではないだろうか。また、「課題・目的的存在」は、やるべきことがあるかという内容が含まれており、「貢献感」には、人の役に立つことをしているか、それらを自ら進んでできているかなどの内容が含まれていることを踏まえると、貢献感が高いほど、人の役に立つことを自分の課題や目的としてとらえやすくなるのではないだろうか。そして、そのような貢献感とは自分自身のやりたいことややるべきことを見出すことにもつながることが示され、共同体感覚を養成することの重要性が推察でき、本研究の結果はこのことによるものと解釈される。

次に、養育態度「理解・信頼」因子が共同体感覚「所属感・信頼感」因子に正の影響を及ぼし、それが大学環境への適応感「課題・目的的存在」因子に正の影響を及ぼしたが、「理解・信頼」には、親が子と話を開こうとしたり、子と対等な立場で接したりなど、親が子を知ろうとしたり認めたりしている内容が含まれている。「所属感・信頼感」には、集団の中に自分の居場所を見つけているか、周りの人々を信頼できているかなどの内容が含まれている。自分のことを知ってもらったり、認めてもらったりすることによって、人はそこに自分の居場所を感じたり、他者との信頼感を築いていけたりするのではないだろうか。また、集団の中で自分の居場所を見つけると、次は、その居場所で自分に求められていること、自分がしなければならないことを考えるよう

table 2-1-4 子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚および大学環境への適応感の各尺度における因子同士の相関関係(N=425)

		養育態度			共同体感覚			大学環境への適応感			
		理解・信頼	自立援助促進	管理・統制	所属感・信頼感	自己受容	貢献感	居心地良さの感覚	被信頼・受容感	課題・目的的存在	拒絶感の無さ
養育態度	理解・信頼	1	.558**	-.080	.346**	.324**	.313**	.378**	.322**	.311**	.270**
	自立援助促進		1	.194**	.281**	.181**	.316**	.295**	.322**	.216**	.036
	管理・統制			1	-.064	-.057	-.010	-.062	.047	-.141**	-.296**
共同体感覚	所属感・信頼感				1	.619**	.709**	.790**	.738**	.551**	.382**
	自己受容					1	.530**	.525**	.521**	.578**	.246**
	貢献感						1	.613**	.643**	.434**	.277**
大学環境への適応感	居心地良さの感覚							1	.811**	.696**	.520**
	被信頼・受容感								1	.544**	.279**
	課題・目的的存在									1	.500**
	拒絶感の無さ										

p**<.01 p* <.05

になるのではないだろうか。つまり、その集団内での自分の役割についてである。この役割が自らの課題や目的になると言える。「所属感・信頼感」に、集団の中に自分の居場所を見つけているかという内容が含まれており、「課題・目的の存在」に、やるべきことがあるかという内容が含まれていることから、養育態度「理解・信頼」因子が共同体感覚「所属感・信頼感」因子に正の影響を及ぼし、それが大学環境への適応感「課題・目的の存在」因子に正の影響を及ぼしたのはこのことによるものと考えられる。

最後に、figure2-1-1 と figure2-1-2 に示されたように、養育態度「理解・信頼」因子が大学環境への適応感「課題・目的の存在」因子への直接効果が見られ、正の影響を与えることが示された。これについては子の気持ちや興味関心事を理解し、支援するような「理解・信頼」の養育態度は大学という環境の中で自らのやるべきことややりたい事を見つけ出すという目的意識を持ちやすいことが示され、大学生活への適応という側面を考える上でも、養育態度の重要性が推察される結果であると解釈される。

②養育態度[自立・援助促進]→共同体感覚[所属感・信頼感]→大学環境への適応感[課題・目的の存在/拒絶感の無さ] (figure2-1-3,2-1-4 参照)

figure2-1-3 及び figure2-1-4 より、養育態度「自立・援助促進」が共同体感覚「所属感・信頼感」因子に正の影響を与え、共同体感覚「所属感・信頼感」因子が大学環境への適応感「課題目的の存在」因子や「拒絶感の無さ」因子に正の影響を与えることが示された。「自立・援助促進」は、親が子に対して自立することだけでなく、自立したうえで、周りにも目を配れる人になるような接し方が多く含まれている。「所属感・信頼感」には、集団の中で信頼関係を作れているか、無闇に疑ったりすることはないかといった内容が含まれている。集団に属していれば、自分が援助するときもあれば、援助してもらうときもあるだろう。お互いが助け合うことによって、信頼が生まれていると考えることもでき、周りへの援助を通して、信頼を築いているのではないだろうか。また、そのような、大学環境への適応感「課題目的の存在」はすでに figure2-1-2 で記した結果と合わせて考えると、親の養育態度の「理解・信頼」に加えて「自立・援助促進」の重要性が示されたといえよう。そして、「拒絶感の無さ」には、周りから無

視や疎外されていないか、その場所で自分が場違いであると感じていないかなど周囲から拒絶されていないかどうかの内容が含まれている。所属している集団があり、その集団との間に信頼感がある場合は、居場所を確保しやすく、孤独を感じる事が少ないと考えられる。それによって、孤独だけではなく、周囲からの拒絶感もあまり持ちにくいのではないだろうか。「所属感・信頼感」には、集団の中で信頼関係を作れているか、集団の一員である実感はあるかといった内容が含まれていることを踏まえると、養育態度「自立・援助促進」が共同体感覚「所属感・信頼感」因子に正の影響を及ぼし、それが大学環境への適応感「課題目的の存在」因子や「拒絶感の無さ」因子に正の影響を及ぼしたのはこれによるものと解釈できる。

一方、子の認知する養育者の養育態度「管理・統制」因子と共同体感覚および大学環境への適応感についてはパスが繋がらず、有意な結果は得られなかった。

①及び②の結果より、大学環境への適応感「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」において養育者の「理解・信頼」や「自立・援助促進」が関わっていることや共同体感覚「貢献感」「所属感・信頼感」の媒介効果が示され、共同体感覚の形成要因としての養育態度の重要性だけでなく、大学環境への適応のための養育態度の重要性が示唆された。また「拒絶感の無さ」の場合、養育態度「自立・援助促進」の直接効果は示されず (figure2-1-4)、共同体感覚が媒介していることが示され、大学環境へ溶け込むという「拒絶感の無さ」のためには特に共同体感覚「所属感・信頼感」につながりやすい養育態度が必要であることが示された。

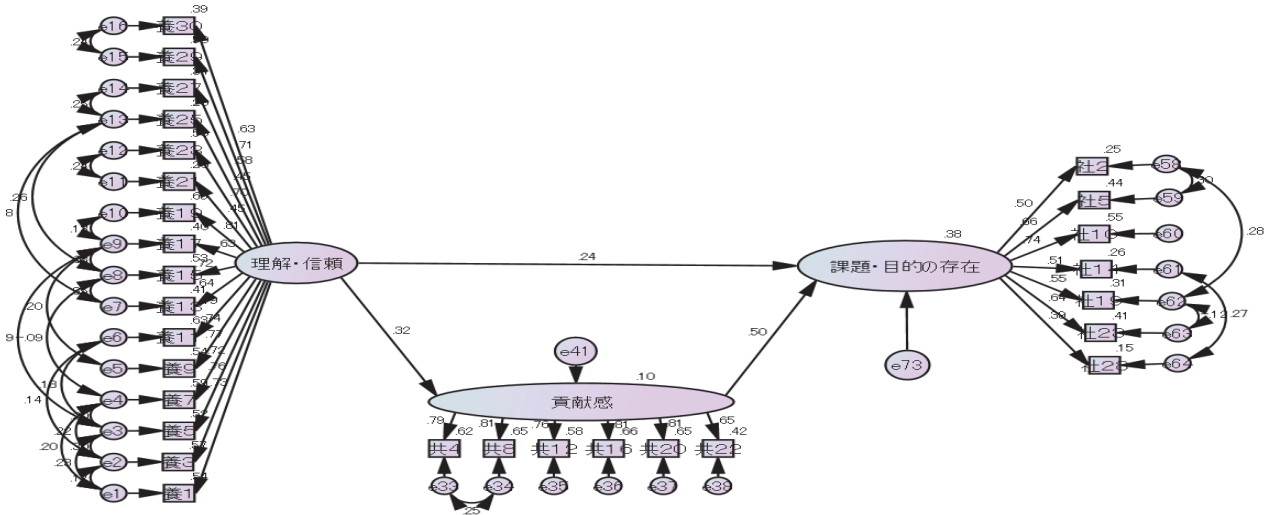


figure 2- 1- 1 養育態度「理解・信頼」→共同体感覚「貢献感」→大学環境への適応感「課題・目的の存在」

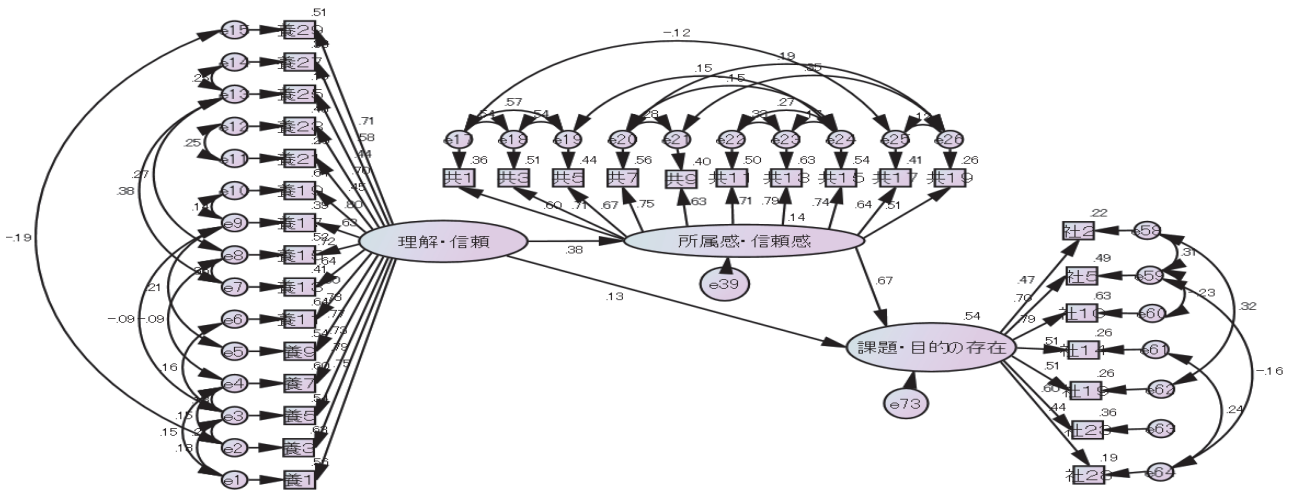


figure 2- 1- 2 養育態度「理解・信頼」→共同体感覚「所属感・信頼感」→大学環境への適応感「課題・目的の存在」

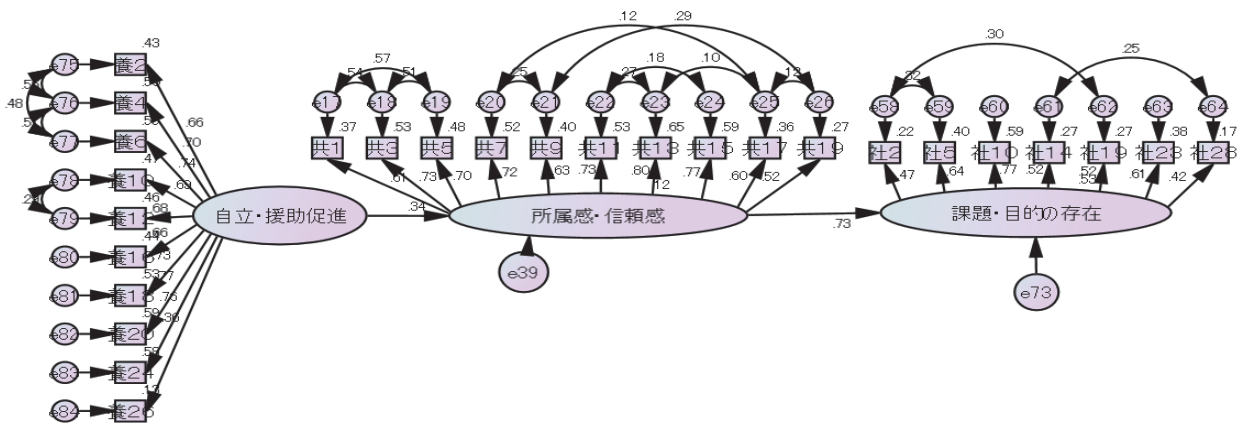


figure 2- 1- 3 養育態度「自立・援助促進」→共同体感覚「所属感・信頼感」→大学環境への適応感「課題・目的の存在」

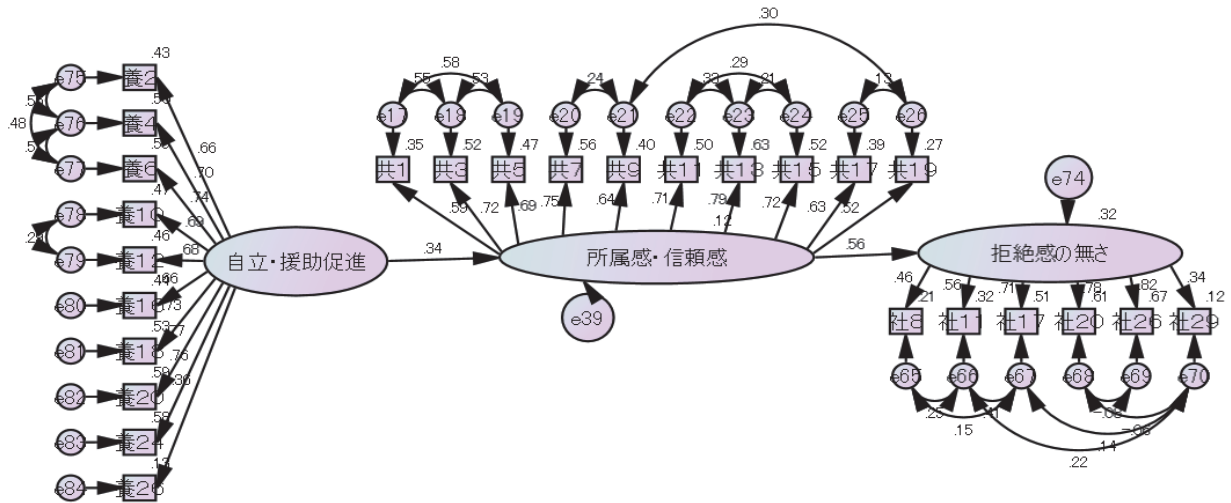


figure 2-1-4
 養育態度「自立・援助促進」→共同体感覚「所属感・信頼感」→大学環境への適応感「拒絶感の無さ」

table 2-1-5 共分散構造分析のモデル適合度

	図 2-1-1	図 2-1-2	図 2-1-3	図 2-1-4
X ² 検定有意確率	.000	.000	.000	.000
GFI	.923	.921	.921	.922
AGFI	.904	.902	.902	.901
RMSEA	.039	.037	.042	.044
RMR	.046	.047	.052	.063

2-2 養育態度による共同体感覚が精神的健康に及ぼす影響についての検討

目的

共同体感覚の形成要因として養育態度を取り上げ、共同体感覚を媒介とした養育態度が精神的健康に及ぼす影響（「養育態度→共同体感覚→精神的健康」）について検討することを目的とする。

方法

【対象者】

北陸に住む大学生 425 名（男性 277 名、女性 145 名、他回答 3 名）

【調査時期】

2021 年 10 月上旬～11 月中旬

【調査内容および測定尺度】

<1> 子の認知する養育者の養育態度について

2-1 と同様である。

<2> 共同体感覚について

2-1 と同様である。

<3> 精神的健康について

中川・大坊（1985）の日本版 General Health Questionnaire 12（以下、GHQ12）を使用した。項目内容を table2-2-3 に示す。採点は、日本版 GHQ 精神健康調査票の手引きに従い行った。その詳細は次の通りである。

GHQ12 のそれぞれの項目について、4 件法で回答を求めた。採点方法は 4 つの選択肢の左から順に 0、1、2、3 の重みをつけ、項目の合計点を算出するリッカート法を採用した。具体的な教示は以下の通りである。

「この数週間の健康状態で、精神的、身体的問題があるかどうかおたずねします。次の質問を読み、最も適切と思われる答えを○で囲んでください。この調査はずっと以前のことでなく、2～3 週間前から現在までの状態についての調査です。」

【分析手続き】

まず、子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚および GHQ12 の相関関係を求める。次に、共同体感覚が GHQ12 の各因子に影響を及ぼすプロセス

について、共分散構造分析による検討を行う。その際、共同体感覚の形成要因として、子の認知する養育者の養育態度に着目し、それらの一連のプロセスについて、分析を行う。

結果および考察

(1) 子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚および精神的健康の関連について

子の認知する養育者の養育態度および共同体感覚が精神的健康に及ぼす影響の検討を行うため、相関関係が求められた。また、それぞれの尺度の項目内容、平均及び標準偏差を table2-2-1、2-2-2、2-2-3 に示す。そして、相関関係の分析結果を table2-2-4 に示す。

まず、養育態度と共同体感覚の相関関係について見ると、養育態度「理解・信頼」因子および「自立・援助促進」因子と共同体感覚の3因子全てとの間において有意な正の相関が示された（全てにおいて $p < .01$ ）。それに対して養育態度「管理・統制」の場合、共同体感覚との間に有意な結果は見られなかった（全てにおいて $p < .01$ ）。

次に、共同体感覚と精神的健康の相関関係について見たところ、共同体感覚3因子全てにおいて GHQ12 の「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子との間に有意な負の相関が示された（全てにおいて $p < .01$ ）。

最後に、養育態度と精神的健康の相関関係について見ると、養育態度「理解・信頼」因子と GHQ12 「社会活動障害」因子との間に有意な負の相関関係が、また養育態度「管理・統制」因子は GHQ12 の2因子それぞれとの間に有意な正の相関が示された（全てにおいて $p < .01$ ）。

これらの結果をまとめると、養育態度「理解・信頼」因子および「自立・援助促進」因子の場合、共同体感覚3因子全ての間において有意な正の相関が示された。また、共同体感覚3因子全てにおいて、GHQ12 「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子との間に有意な負の相関関係が示された。そして、これらから、親の養育態度を自分への理解や信頼を感じられたり、自立を期待されたり、さらに周りへの援助を促すものと子が認知することは共同体感覚を通して精神的健康に関連していることが示唆された。

(2) 子の認知する養育者の養育態度による共同体感覚が精神的健康に及ぼす影響について

子の認知する養育者の養育態度と共同体感覚が精神的健康にどのような影響を及ぼすのかについて調べるため、共分散構造分析を行った。有意な結果が得られなかったパスを削除し、検討を重ねた結果、figure2-2-1、figure2-2-2、figure2-2-3 および figure2-2-4 のモデルを得ることができた。なお、モデルの適合度は、table2-2-5 に示す。

主な結果について以下のようにまとめて見ていく。

① 養育態度 [理解・信頼] → 共同体感覚 [自己受容] → 精神的健康 [うつ症傾向 / 社会活動障害] (figure2-2-1、2-2-2 参照)

figure2-2-1 および figure2-2-2 より、養育態度「理解・信頼」因子が共同体感覚「自己受容」因子に正の影響を与え、それが GHQ12 「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子に負の影響を与えることが示された。「自己受容」には、自分自身に納得しているか、自分自身を認めることができているかとい

table2-2-1 子の認知する養育者の養育態度についての項目内容 (N = 425)

No	「子の認知する養育者の養育態度」尺度項目	平均	SD
F1: 理解・信頼			
1	私の話をよく聞こうとしてくれる	4.40	0.84
3	私と気持ちが通じ合っている	3.67	0.99
5	私のことをよく知ってくれている	4.04	0.96
7	私と対等な関係を築いてくれている	3.98	1.08
9	いつも私のことを気にかけてくれる	4.27	0.84
11	私の悩みや心配事を理解してくれる	3.87	1.02
13	私のことが一番好きだ	3.61	1.02
15	私と一緒にいて幸せだと思う	3.85	0.91
17	私にたびたび話しかけてくれる	4.43	1.65
19	私の喜びや悲しみなどの感情に同情してくれる	3.97	1.00
21	私に何か頼む際は命令口調ではなく、お願い口調だ	3.64	1.10
23	私に些細なことでも感謝の気持ちを伝えてくれる	3.88	0.98
25	私のことを一番の拠り所としている	3.05	1.09
27	私に何でも話してくれる	3.38	1.09
29	私が夢中になっていることについて支援してくれる	4.07	0.91
30	私がいみんなの役に立てるように支援してくれる	3.64	1.00
F2: 自立・援助促進			
2	私に進んで人の役に立つ行動をするようにとよく言う	3.31	1.21
4	私に困っている人がいれば進んで助けるようにとよく言う	3.35	1.18
6	私に人の役に立つことの重要性を教えてくれる	3.37	1.18
10	私に自分の言動には責任を持つようにとよく言う	3.71	1.17
12	私に思慮分別をつけるようにと言う	3.49	1.19
16	人に言われる前から行動するようにと私に言う	3.45	1.18
18	私に失敗から学ぶことも大切だとよく言う	3.66	1.17
20	最後までやり遂げる大切さを教えてくれる	3.66	1.12
24	失敗を恐れず自分の考えで行動するように言う	3.49	1.10
26	私にPDCAサイクルを確立するようにと言う	2.47	1.16
F3: 管理・統制			
8	私が自分ですべきことに口出しをする	3.36	1.23
14	私が自分ですべきことを代わりにやってしまう	2.97	1.24
22	私に指図する	2.72	1.18
28	私に自分で物事を決めさせることはあまりない	2.34	1.17

table2-2-2 共同体感覚についての項目内容 (N=425)

No	「共同体感覚」尺度項目	平均	SD
F1:所属感・信頼感			
1	自分から進んで人の輪の中に入ることができている	2.99	1.10
3	自分から進んで人と信頼関係を作ることができている	3.26	1.10
5	積極的に周りの人と関わりをもつことができている	3.09	1.13
7	自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができている	3.74	0.94
9	全体的に他人を信じている	3.33	1.09
11	今自分がいるグループや集団に自主的に加わっている	3.50	1.07
13	自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している	3.53	1.04
15	周囲の人との活動に積極的に参加している	3.25	1.04
17	頼りにできる人がいる	3.92	0.98
19	周りの人を無闇に疑ったりは決してしない	3.36	1.07
F2:自己受容			
2	自分自身に納得している	3.29	1.13
6	自分で自分自身を認めることができている	3.26	1.11
10	欠点も含めて自分のことが好きだ	3.13	1.20
14	今の自分に満足している	3.10	1.17
18	今の自分を大切にしている	3.62	1.00
21	自分には何かしら誇れるものがある	3.38	1.13
F3:貢献感			
4	進んで人の役に立つことをすることができている	3.30	1.00
8	人のためになることを積極的にすることができている	3.35	0.96
12	困っている人に対して積極的に手助けすることができている	3.49	0.98
16	他人のためでも自ら進んで力を尽くすことができている	3.42	1.00
20	周囲の人々のために自主的に行動することができている	3.38	0.96
22	誰に対しても思いやりをもって接することができている	3.76	0.95

出典：高坂康雅 (1999) 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究 59 p88-99

table2-2-3 GHQ12についての項目内容 (N=425)

No	「GHQ12」尺度項目	平均	SD
F1:うつ症傾向			
1	問題を解決できなくて困ったことが	1.23	0.81
2	自分は役に立たない人間だと考えたことは	1.20	0.87
3	いつもより気が重くて、憂うつになることが	1.36	0.90
6	心配ごとがあって、よく眠れないようなことは	0.96	0.86
9	自信を失ったことは	1.40	0.85
11	いつもストレスを感じたことが	1.38	0.80
F2:社会活動障害			
4	何かをする時いつもより集中して	0.98	0.64
5	一般的にみて、しあわせいつもより感じたことは	1.12	0.76
7	いつもより容易に物ごとを決めることが	1.01	0.60
8	いつもより問題があった時に積極的に解決しようとするのが	0.96	0.56
10	いつもより日常生活を楽しく送ることが	0.85	0.65
12	いつもより自分がしていることに生きがいを感じるものが	0.95	0.62

出典：中川泰彬・大坊都夫 (1985) 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社

う内容が含まれており、「理解・信頼」には、親は、子のことが一番好きか、子と一緒にいて幸せだと思うか、子のことを一番の拠り所としているかという内容が含まれている。子は、親から好まれたり、頼りにされたりすることによって、自分自身に自信を持つことができると考えられ、それが自分自身を認めることにつながっているのではないだろうか。

また、「うつ症傾向」には、自分は役に立たない人間であると考えたことがあるか、自信を失ったことはあるかという内容が含まれている。自分自身に納得しており、自分自身を認めることができていると、自己肯定感の向上にもつながり、そのような場合、自分は役に立たない人間であると考えたり、自信を失ったりすることはあまりないのではないだろうか。そして、「社会活動障害」には、いつもより容易に物事を決めることができたか、問題があった時に積極的に解決しようとするのができたかという内容が含まれている。自分自身に納得しており、自分自身を認めることができている場合、自分自身の言動に自信を持つことができ、決断や問題の解決をスムーズに行えるのではないだろうか。「自己受容」に、自分自身に納得しているか、自分自身を認めることをできているかという内容が含まれていることを踏まえると、養育態度「理解・信頼」因子が共同体感覚「自己受容」因子に正の影響を及ぼし、それによりGHQ12「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子に負の影響が及ぼされたのはこれによるものと解釈される。

②養育態度[自立・援助促進]→共同体感覚[自己受容]→精神的健康[うつ症傾向/社会的活動障害](figure2-2-3、2-2-4 参照)

まず、figure2-2-3 および figure2-2-4 より、養育態度「自立・援助促進」因子が共同体感覚「自己受容」因子に正の影響を与え、それがGHQ12「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子に負の影響を与えることが示された。「自己受容」には、自分自身に納得しているか、自分自身を認めることができているかという内容が含まれており、「自立・援助促進」には、親が子に対して、自分の言動には責任を持つように言ったり、進んで人の役に立つ行動をするように言ったりなど、子が独り立ちすることや周りに貢献することを促す内容が含まれている。親からの促しによって、自立できたり、周りに貢献できたりすると、自分に自信がついて、自分自身を認めるこ

table 2-2-4 子の認知する養育者の養育態度、共同体感覚およびGHQ12の各尺度における因子同士の相関関係(N=425)

		養育態度			共同体感覚			GHQ12	
		理解・信頼	自立援助促進	管理・統制	所属感・信頼感	自己受容	貢献感	うつ症傾向	社会活動障害
養育態度	理解・信頼	1	.529**	.005	.426**	.338**	.408**	-.062	-.110*
	自立援助促進		1	.202**	.437**	.292**	.436**	-.004	-.040
	管理・統制			1	.035	-.046	.039	.173**	.144**
共同体感覚	所属感・信頼感				1	.605**	.790**	-.226**	-.324**
	自己受容					1	.542**	-.338**	-.406**
	貢献感						1	-.148**	-.238**
GHQ12	うつ症傾向							1	.510**
	社会活動障害								1

p**<.01 p*<.05

とにつながるのではないだろうか。さらに、共同体感覚「自己受容」因子がGHQ12「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子に負の影響を与えることが示されており、養育態度「自立・援助促進」因子が共同体感覚「自己受容」因子に正の影響を及ぼし、それにより、GHQ12「うつ症傾向」因子および「社会活動障害」因子に負の影響が及ぼされたのはこれによるものと解釈できる。

一方、養育態度「管理・統制」因子と共同体感覚

および精神的健康についてはパスが繋がらず、有意な結果は得られなかった。

①および②の結果より、うつ症傾向に陥ったり、社会活動に支障をきたしたりしないようにするためには、共同体感覚としての「自己受容」が必要であり、その形成要因として親が子に示す「理解・信頼」および「自立・援助促進」の養育態度が重要であることが示された。

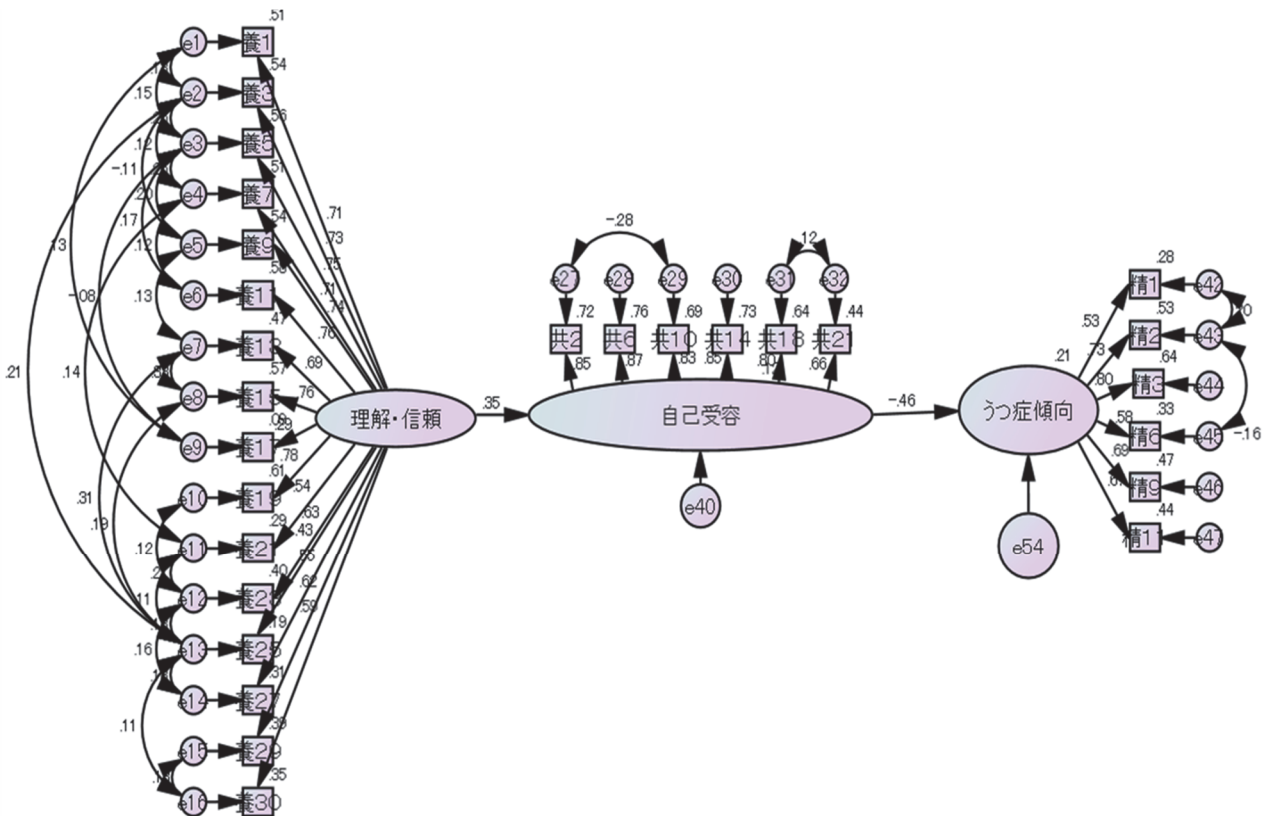


figure 2-2-1 養育態度「理解・信頼」→共同体感覚「自己受容」→GHQ12「うつ症傾向」

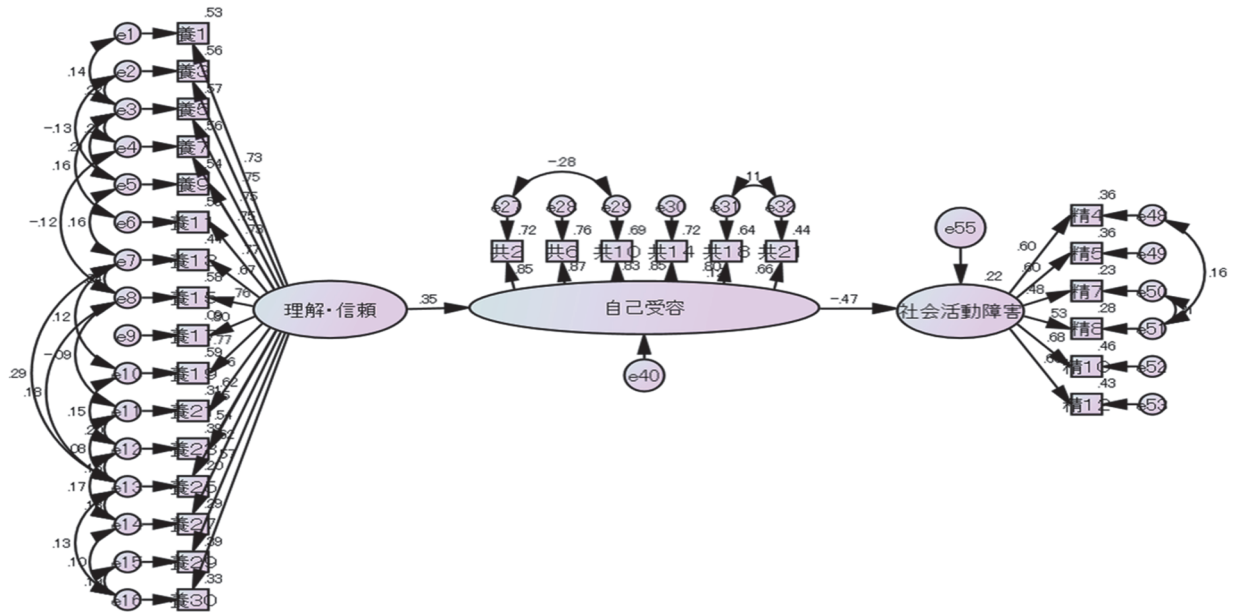


figure 2- 2- 2 養育態度「理解・信頼」→共同体感覚「自己受容」→GHQ12「社会活動障害」

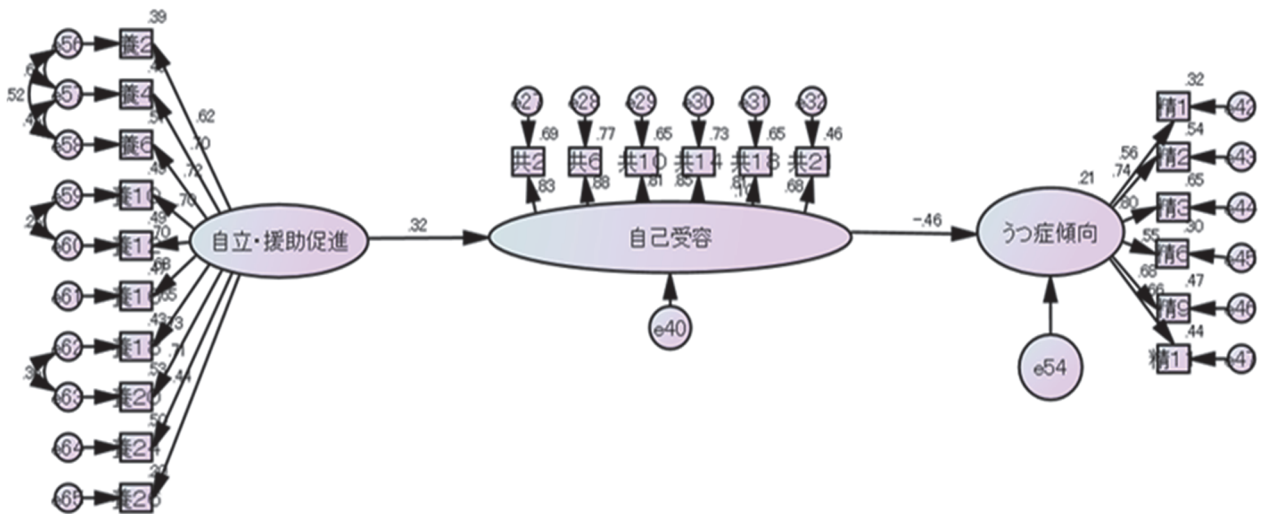


figure 2- 2- 3 養育態度「自立・援助促進」→共同体感覚「自己受容」→GHQ12「うつ症傾向」

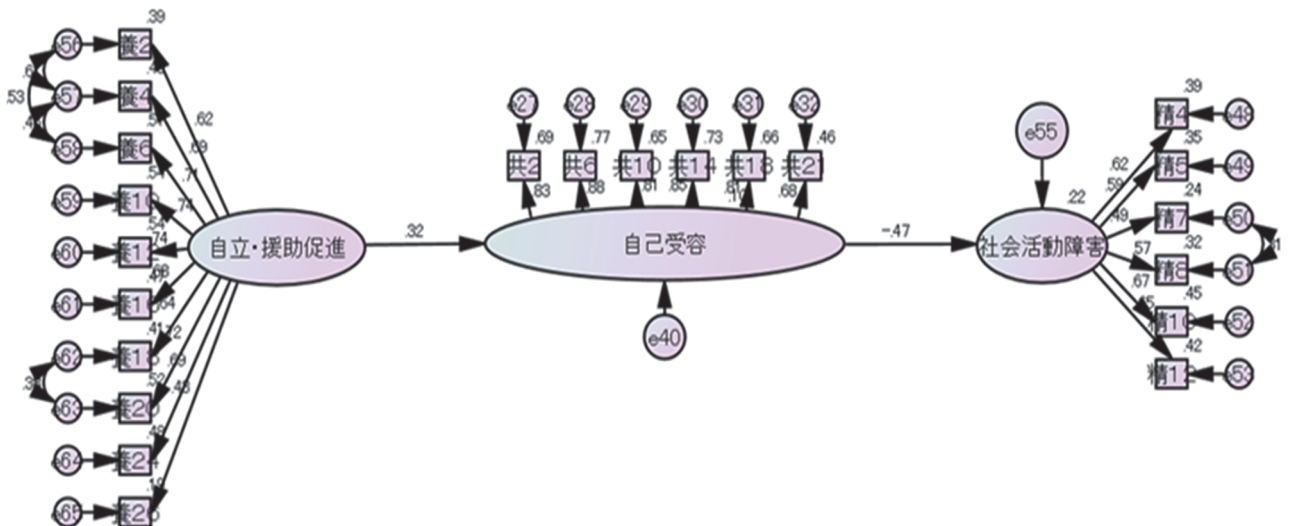


figure 2- 2- 4 養育態度「自立・援助促進」→共同体感覚「自己受容」→GHQ12「社会活動障害」

table2-2-5 共分散構造分析のモデル適合度

	図2-2-1	図2-2-2	図2-2-3	図2-2-4
X ² 検定有意確率	.000	.000	.000	.000
GFI	.921	.921	.926	.927
AGFI	.900	.900	.908	.908
RMSEA	.039	.038	.046	.045
RMR	.049	.043	.060	.050

全体的考察

本研究の全体的な目的は、まず養育者の養育態度は共同体感覚の形成に影響を与え、その共同体感覚と社会的適応ならびに精神的健康との間に関連が見られることが予想され、これについて検討することである。

1. 子の認知する親の養育態度尺度について

本研究では、共同体感覚の形成に関連していると考えられる養育態度に焦点を当てて、子の認知する親の養育態度尺度作成を試みた（子の認知する親の養育態度は以下養育態度と略する）。その際、アドラー心理学をもとにした子育てプログラムを開発・普及した岩井（2015）や岸見（2013）の指摘を考慮に入れ項目の収集・作成を行った。そこでより適切な項目の抽出のため予備調査を行った。

予備調査で得られた結果を基に作成された項目を用いて大学生を対象に本調査を行い、因子分析を行ったところ、「理解・信頼」「自立・援助促進」「管理・統制」という3因子が見出された。因子仮定後にCronbachの α 係数を算出したところ、第1因子、第2因子、第3因子それぞれにおいて順に、0.931、0.867、0.655であり、ある程度の信頼性が得られたと考えられる。

次に、妥当性の検討ため、養育態度尺度の各因子と心理的ストレス反応尺度、大学生活不安尺度の各因子とのPearsonの相関係数を算出した。その結果、養育態度尺度の「理解・信頼」因子は、心理的ストレス反応尺度の3因子すべての間と、大学生活不安尺度の「評価不安」因子を除いた2つの因子との間に有意な負の相関関係が示された（全て $p<.01$ ）。養育態度尺度の「自立・援助促進」因子は、心理的ストレス反応尺度の「無気力」因子及び大学生活不安尺度の「大学不適応」因子との間に有意な負の相関関係が示された（いずれも $p<.01$ ）。養育態度尺

度の「管理・統制」因子は、心理的ストレス反応尺度の3因子すべてとの間（全て $p<.01$ ）と大学生活不安尺度の「大学不適応」因子との間に正の相関関係が（ $p<.01$ ）、また、「日常生活不安」「評価不安」の2因子とは有意な正の相関関係が示された（いずれも $p<.05$ ）。本研究では、養育態度が子のことを理解しているものや子の自立や周囲への援助を促すものである場合、子のストレスや不安は軽減され、子のことを統制するものである場合、子のストレスや不安は増長されると予想されたが、概ね予想通りの結果が得られ、ある程度の妥当性が得られたと言えよう。

以上のことから、共同体感覚の形成要因としての養育態度は3因子構造であることが示された。本研究ではこれを以て養育態度尺度として用い、以下の検討を行った。

2. 養育態度による共同体感覚が社会的適応および精神的健康に与える影響について

まず、養育態度→共同体感覚→大学環境への適応感についての考察を述べる。

figure2-1-1、2-1-2より、養育態度「理解・信頼」因子が共同体感覚「貢献感」「所属感・信頼感」因子に正の影響を与え、それが大学環境への適応感「課題目的の存在」に正の影響を及ぼすことが示された。そして、養育態度「理解・信頼」因子の場合、大学環境への適応感「課題・目的の存在」因子に正の影響を与えるという直接効果が示された。次に、figure2-1-3、2-1-4より養育態度「自立・援助促進」因子が共同体感覚「所属感・信頼感」因子に正の影響を与え、それらが大学環境への適応感「課題・目的の存在」因子および「拒絶感の無さ」因子に正の影響を与えることが示された。

これらの結果より、子が課題や目的の存在を認識するためには、親が、子に対して、頼りにしていること、認めていることを示したり、自立すること、

周りにも目を配ることを促したりすることによって、子が貢献感および所属感・信頼感を身に着けることが重要であると推察される。また、子が周囲から拒絶されたり、疎外されたりしていると感じないためには、子が所属感や信頼感を身に着けられるように、親は、子に対して、自立することや周りにも目を配ることを促すことが重要であると推察される。

次に、養育態度→共同体感覚→精神的適応についての考察を述べる。

養育態度「理解・信頼」因子及び「自立・援助促進」因子が共同体感覚「自己受容」因子に負の影響を与え、共同体感覚「自己受容」因子がGHQ12「うつ症傾向」及び社会的活動因子に負の影響を与えることが示された (figure2-2-1、2-2-2、figure2-2-3、2-2-4 参照)。

これらの結果より、子がうつ症傾向に陥ったり、社会活動に支障をきたさないようにするためには、親が、子に対して、頼りにしていること、認めていることを示したり、自立すること、周りにも目を配ることを促したりすることによって、子が自己受容することが重要であると推察される。

以上のことから、本研究の仮説「養育者の養育態度が自分のことを理解し、自立心を促すものであると子が認知している場合、その親の養育態度は子の共同体感覚の形成につながり、その共同体感覚が社会的適応および精神的健康に正の影響を与えるであろう。」は、概ね支持されたと言えよう。

また、共同体感覚は周囲の人々とのつながりに焦点を当てているが (Crandall, 1981; Mosak Maniacci, 1999 坂本監訳 2006; Adler 1927)、他者を認め、他者に認めてもらうという関係を築くためには、自らが自らを認めていることが必要であろう。その観点から、精神的健康において自己受容は共同体感覚の中でも重要な側面の一つであると言える。そして、「自己受容」に正の影響を与えている養育態度の「理解・信頼」及び「自立・援助促進」は親がとるべき養育態度の中でも特に重要視していく必要があると考えられる。

今後の課題

本研究では、共同体感覚の形成要因として親の養育態度を取り上げ、その養育態度の尺度の作成を試

み「子の認知する親の養育態度→共同体感覚→社会的適応および精神的健康」という仮説のもと検討を行ったが、以下のようなことが問題点として指摘される。

まず、本研究において作成された、子の認知する親の養育態度尺度において「管理・統制」因子の場合 α 係数が他の2つの因子と比べて少し低く、また妥当性検討においても他の尺度との相関関係が低かったことから、特に管理・統制因子においては信頼性及び妥当性のための因子項目内容のさらなる検討が求められる。その上で確証的因子分析を行うことにより、尺度の因子構造を再度確認することが必要であろう。それにより養育態度尺度の下位尺度としての管理・統制因子の明確な位置づけができると考えられる。そのような一連の検討を行うことによって、養育態度と共同体感覚の関連をより明らかにすることができるであろう。次に、共同体感覚の形成要因として今回は子の認知する親の養育態度を取り上げたが、個人の共同体感覚形成やその発達促進のためには養育態度だけでなく、親子関係以外の兄弟関係をはじめた対人関係も共同体感覚の形成要因として考えられる。

今後、これらのことをより詳細に検討することにより共同体感覚が、精神的健康や社会的適応などに及ぼす影響についてより明らかにできるであろう。

参考文献

- Adler, A. (1927) : Psychotherapie und erziehung. Bd.1.Frankfurt, Germany: Fischer Taschenbush-Verlag.
- Adler, A. (1973) : Menschenkenntnis. Frankfurt, Germany: Fischer Taschenbush-Verlag.
- (Original work published (1926).) (アドラー ,A. 岸見一郎 (訳) (2008) . 人間知の心理学 アルテ)
- Ansbacher, H. L., & Ansbacher, R. R. (Eds.) (1956) : The individual psychology of Alfred Adler: A systematic presentation in selections from his writings. New York: Basic Books
- Crandall, J. E. (1981) : Theory and measurement of social interest: Empirical tests of Alfred Adler's concept. New York: Columbia University Press.
- Dreikurs, R. (1950) : Fundamentals of Adlerian psychology. New York : Greenberg. (Original

- work published (1933.) (ドライカース, R. 野田俊作 (監訳) 宮野栄 (訳) (1996). アドラー心理学の基礎 一光社)
- 藤井義久 (1998): 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究 第 68 巻第 6 号 p441-448
- 堀・長谷川 (2018): 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響 - 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数として - 東海学院大学紀要 12 29-39
- 岩井俊憲 (2011): 勇気づけの心理学 増補・改訂版 金子書房
- 岩井俊憲 (2015): 親と子のアドラー心理学 勇気づけて共に育つ キノブックス
- 金子劭榮・新瀬和夫 (2002): 小学生の向社会性と親の養育態度 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編) 第 51 巻 p 145-158
- 姜信善・山崎悠希 (2013): 子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について—養育態度を「統制」の仕方からとらえて—人間発達科学部紀要 第 8 巻第 1 号: 9 - 2
- 姜信善・山崎悠希 (2015): 子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について—養育態度を「受容」次元からとらえて—人間発達科学部紀要 第 10 巻第 1 号: 1 - 17
- 柏木恵子・松田惺・宮本美沙子・久世敏雄・三輪弘道 (1978): 親子関係の心理 有意閣新書
- 岸見一郎 (1999): アドラー心理学入門 ベスト新書
- 岸見一郎・古賀史健 (2013): 嫌われる勇気 ダイヤモンド社
- 高坂康雅 (2011): 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究 59 p 88-99
- 高坂康雅 (2012): 大学生における共同体感覚と社会的行動との関連 和光大学現代人間学部紀要 第 5 号 p 53 - 60
- Lundin, R. W. (1989): Alfred Adler's basic concepts and implications. Muncie, IN: Accelerated Development. (ランディン, R. W. 前田憲一 (訳) (1998). アドラー心理学入門 一光社)
- Manaster, G.J., & Corsini, R.J. (1982): Individual psychology: Theory and practice. Denver, CO: F.E. Peacock Publishers. (マナスター, G.J., コルシーニ, R. J. 高尾利数・前田憲一 (訳) (1995). 現代アドラー心理学 春秋社)
- Mosak, H. H., & Maniacci, M. P. (1999): A primer of Adlerian psychology: The analytic-behavioral-cognitive psychology of Alfred Adler. London: Brunner Mazel. (モサク, H. H.・マニアッチ, M. P. 坂本玲子 (監訳) キャラカー京子 (訳) (2006). 現代に生きるアドラー心理学—分析的認知行動心理学を学ぶ— 一光社)
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985): 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 野田俊作 (1992): 共同体感覚の諸相 アドレリアン第 5 巻第 2 号 (通巻第 9 号)
- 大久保智生・青柳肇 (2003): 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人・環境の適合性の視点からパーソナリティ研究 第 12 巻 第 1 号 p 38-39
- 篠原弘章・福山久子 (1987): 両親の養育態度が児童の達成動機と学習意欲および学校不安に及ぼす影響について 熊本大学教育学部紀要、人文科学 第 36 号 p 257-273
- 菅原・伊藤 (2006): 児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響—自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として— (岩手大学教育学部研究年報 第 65 巻 31 - 44
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002): 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究 第 50 巻 第 2 号 129-140
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997): 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS・18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究 Vol. 4, No. 1 p22-29
- 高富・桂田 (2011): 大学生の心理的自立と親の養育態度との関連 (高富 莉那・桂田恵美子 臨床教育心理学研究 3 vol.37 27-32
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997): 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響—積極拒否型の養育態度の観点から—教育心理学研究 第 45 巻 第 2 号 173-182
- 戸ヶ崎泰子 (1999): 小学生の学校不適応感に及ぼす小学生の社会的スキルと養育態度の影響 日本教育心理学会第 41 回総会発表論文集 709
- 山本・上手 (2017): 親の養育態度が大学生の評価懸念及び適応感に及ぼす影響の検討 広島大学大

学院心理臨床教育研究センター紀要 第 16 卷

89-105

八越忍・新井邦二郎（2007）：母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集 第 49 回総会発表論文集

謝辞

本研究を実施するにあたり、質問紙調査に快くご了承くださいました先生方より、多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。そして、質問紙調査にご協力くださいました学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

受付年月日（2022/5/19）

受理年月日（2022/7/21）